

周辺の  
みどころ

日牟禮八幡宮（近江八幡市宮内町）

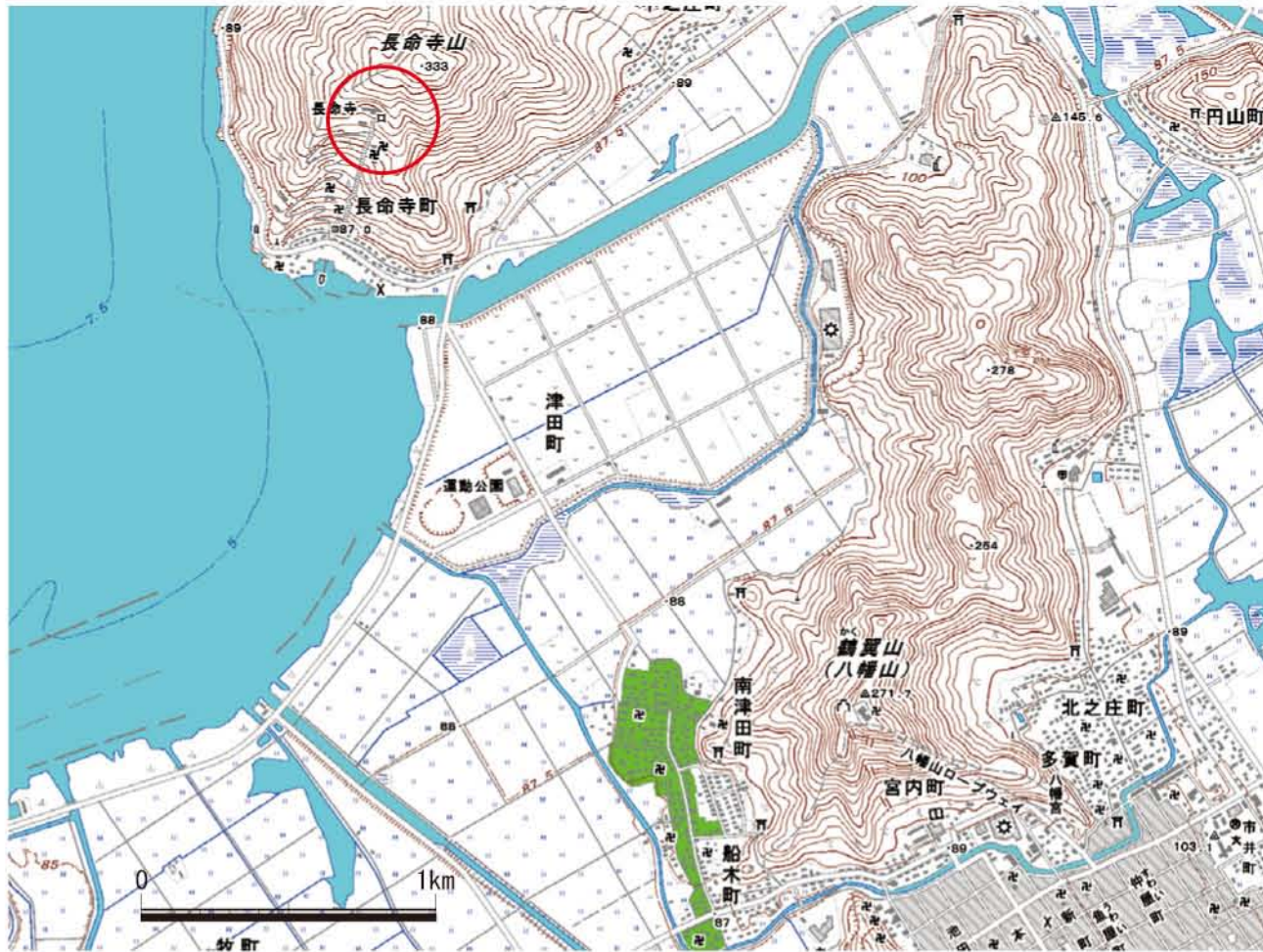
八幡山（標高283.8m）の南麓に鎮座する古社。中世には近江守護佐々木氏の崇敬が篤く、江戸時代以後は旧八幡町の総社として近江商人らの信仰を集めた。重要文化財に鎌倉時代の神像4軀、および正保4年（1647）寄進の「安南渡海船額」1面がある。

八幡山城跡（近江八幡市宮内町）

天正13年（1585）豊臣秀次が八幡山に築いた居城の跡。本丸跡には京都から尼門跡寺院のひとつである瑞龍寺が移築され、秀次の菩提をとむらっている。瑞龍寺へは山麓から八幡山ロープウェイで約4分。



八幡山城跡石垣



【アクセス】

- JR近江八幡駅下車、近江バス「休暇村」行きで「長命寺」下車、徒歩20分

【もっと詳しく知りたいひとへの案内】  
（関連文献／関連施設）

- 『古寺巡礼 近江7 長命寺』淡交社、昭和55年
- 『長命寺古文書等調査報告書』滋賀県教育委員会、平成15年
- 『長命寺参詣曼荼羅のてびき』近江八幡市立資料館、平成21年

# 信仰の島 長命寺

近江八幡市長命寺



長命寺参詣曼荼羅

長命寺は琵琶湖の東岸、標高333mの長命寺山腹に位置する。

湖を広く見渡す景勝地に重要文化財の本堂をはじめとした中世建築の堂塔が軒をつらね、壮観な伽藍を今に伝える。西国観音霊場のひとつとして著名だが、秘仏厨子の奥室には薬師如来像が祀られ、境内に不老滝のあることなど、水と関わる深い信仰の存在を指摘できる。

永正13年（1516）に兵火にかかるなど災難にも見舞われたが、庶民信仰に支えられて復興を遂げている。その際、勧進比丘尼らが諸国へ持ち運んで「絵解き」を行い、寄進や参詣の手引きとしたのが「長命寺参詣曼荼羅」である。そこには船上陸し、裸足で聖地を巡拝する人々の姿がある。かつては島であった霊場の姿をしのぼせる。







長命寺伽藍の雪景



絹本著色勢至菩薩像（部分 重要文化財）



金銅種字華鬘（重要文化財）

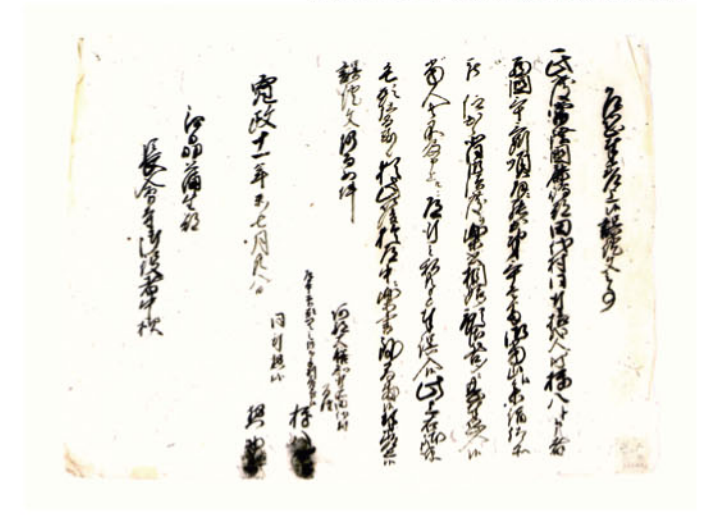
地藏菩薩の種字「カ」をあらわした、鎌倉期金属工芸の優品。県立琵琶湖文化館に寄託。



長命寺文書（県指定有形文化財）



新発見の長命寺参詣曼荼羅（部分）女性による木曳き



楽書誤り証文

## 信仰の島 長命寺

所在地 近江八幡市長命寺町

### 長寿信仰と秘仏本尊

長命寺は西国三十三カ所観音霊場の第31番札として篤い信仰を集め、寺伝では武内宿禰が山を開き、聖徳太子が寺を創建したと伝える。武内宿禰の長寿にちなみ、「長命寺」と名付けられたという。琵琶湖をめぐる霊地への信仰の中には、しばしば長寿の神仏が登場する。湖西のひら比良明神はその代表格というべき存在だが、対岸の長命寺にも長寿信仰のあることは好対照をなして興味深い。

本尊は本堂厨子内の中央に安置される秘仏の木造千手観音立像（重文）である。厨子内には他に、中尊の向かって右側に木造十一面観音立像（重文）、左側に木造聖観音立像（重文）を安置。寺では古くから、秘仏の三尊を一体の存在として信仰している。厨子の後室には薬師如来像も祀られており、もとは天台寺院であった寺の歴史を物語るとともに、琵琶湖をめぐる薬師（水）信仰の拠点としての隠れた側面をかいま見せている。

### 勧進・参詣・楽書

中世から近世にかけて、長命寺の堂塔復興と維持に力を尽くしたのが、春庭慈芳をはじめとする勧進比丘尼であった。春庭は長命寺の米穀出納や勧進を司る塔頭寺院・穀屋寺の開基として知られてきた。平成21年、近江八幡市立資料館がその関係資料を初めて調査し、大量の古文書を確認した。同時に、これまで知られていなかった長命寺参詣曼荼羅3点、および熊野観心十界図2点を発見している。

長命寺参詣曼荼羅はこれまで、長命寺が所有する「長命寺本」1幅とスイスに所在する「フグラ本」1隻の計2点が知られるだけであったが、今回その他に3点の異本が同所から出現したことは、画期的な発見である。また、長命寺参詣曼荼羅と同じ木箱から熊野観心十界図2点が発見されたことの意義も大きい。古文書とあわせて、長命寺の再興につくした穀屋（寺）や勧進比丘尼の盛んな活躍がわかる貴重な資料群として、大いに注目される。

なお、長命寺には中世文書303点を含む475点の古文書が伝来し、平成19年度に県指定有形文化財に指定された。平安時代、承保元年（1074）の「奥島庄司土師助正島地寄進状」を最古に、寄進状・売券類など寺領に係るものや、「結解状」（年貢米等の出納記録）などの寺院経済史料など、わが国中世寺院研究に基礎史料を提供する貴重な文書群である。また近江守護佐々木六角氏の発給文書が時代を追って通観でき、織豊政権時代の豊富な文書群などと相まっ

て、近江中世、戦国史研究の上で重要な位置を占める。近世文書は多様であるが、巡礼宿帳、往来手形、楽書誤り証文など、巡礼者に係るものが含まれている。楽書誤り証文は、長命寺への参詣者が堂塔に「楽書（落書き）」を実行しようとして見つかри、反省文を書かされたもの。江戸中期の旅行ブームを背景に、文化財犯罪の発生と当時の対処法について知ることのできる、ユニークな史料である。